

〈論文〉

〈Paper〉

資本主義社会は人間の心を破壊する
Capitalistic Society Will Destroy Human Minds

富岡 昭
Tomioka Akira

上武大学経営情報学部, 〒370-1393 群馬県多野郡新町270-1
Faculty of Management Information Sciences, Jobu University, Shimmachi, Gunma, 370-1393, Japan

受付 2002年 8 月12日
Received 12 August 2002

抄 録

金をベースにした資本主義社会は人間を金の亡者にし、金がないと生きてゆけないと考え、いつの間にか人間が人間として生きていて楽しいと感じる心を破壊してしまう。自我を確立し、人間として自由に自分の好きなように楽しむ能力を身につける必要性を強調した。

キーワード：働く意味；拝金主義；生き甲斐；自我の放棄

Abstract

Capitalistic Society as Adam Smith stipulated in his book “The Wealth of Nations” is built on money which leads to the society where people chase money all the way, so-called mammonists, money twists human minds in such a way that people can not enjoy their lives heartfully. I emphasized the importance of self-government or autonomy so that people can enjoy their lives in their ways.

Key words and phrases: money; capitalism; autonomy; ego-surrender; meaning of work

資本主義社会は人間の心を破壊する

富 岡 昭

マックス・ウェーバーが100年程前に『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』⁽¹⁾という本の中で資本主義社会はそのあまりに成功するがゆえに崩壊するとその未来を悲観的に予測したことはよく知られている。私はこの論文でアメリカ資本主義社会はその社会に住んでいる人間の心を迷わせ「この世の中お金が全てだ」という生き方を受け入れさせ、物質重視社会を作りだし、結果として人間の心の平和を破壊すると主張したい。そして、実学を重視する学問（すぐ役に立つ学問）が社会に蔓延し、金儲けに狂奔する人間が増え、冷たい心の人間が住む社会が出現することはなにも世界貿易センターにジェット機が突入しなくてもすでに分かっていたことである。世界中のビジネス・スクールが学生に対して「どうすればもっと金が儲かるか」という実学（ノウハウ）を教えている現状を観察すれば納得できる、そして、ビジネス・スクールが大学本来の在り方から逸脱し、結果として大学としての存在理由が消えて無くなってしまったと私は考える。オランダの哲学者スピノザによると、「人間が生きるとは学習することである、学習するとはその本人が納得することである、納得するとは自由になることである」⁽²⁾と述べているが、自分が疑問に思っていることに対して自分で調査分析し「成る程そういうことか」と納得すれば自分を縛りつけていた諸々の制約は心理的に消滅し、人間の心は自由になり、自分が成し遂げたいと考えている事柄を達成することにすべてのエネルギーを注ぎ込むことが可能になる。そして、そのプロセスがいかに苦しくても少しも気にならないはずである。そして、何かを学習すると言う行動が苦しければ苦しいほどその苦痛は最終的に達成感と充足感という最高の喜びに変化する可能性が高い⁽³⁾。しかしその喜びを手にするには耐えがたいほどの苦しみに耐える忍耐力が必要であることは言うまでもない。大学で学ぶことが将来の就職のため、給料を貰うためと言う考え方は自分で自分の人生を惨めにしていると私は考える。一流大学に入学するため、一流企業に就職し綺麗な嫁さんを貰うためには大学くらい出ていなければと現実的に考えて大学に来ている学生が増えているがもう一度学ぶとはどういうことかその本質について考えてみる必要がある。学ぶとは人間として生まれつき持っている潜在能力を顕在化するため、自分が楽しく生きていくことが出来る能力を向上させるためと考えると死ぬまで学んでも厭きることはない。大学を卒業したら学ぶことも卒業だと考える人間は自分の人生を楽しむことが限られてしまう。職人さんが「死ぬまで学習ですよ」と笑顔で答える人が多いが人間として死ぬまで学ぶ喜びを楽しむことが出来れば、死ぬ時に「アー俺の人生楽しかった」とにっこり笑って死ぬことが出来る。

そこで、現在のビジネス・スクールの教育を考えるとアメリカ的金融資本主義社会の影響で、大学教育もサービス産業であると定義し、大学にとって顧客は学生であるから学生のニーズに合わせてカリキュラムを作成し、いくら教育上必要な科目であっても必修科目とはせず学生のご機嫌をとる大学が増えていることは憂慮に耐えない。そして、多くの学生の興味を引くような科目をカリキュラムに並べて、一人でも多くの志願者を引きつけるために、面白そうな科目、すぐ役に立ちそうな科目、分かり易そうな科目、女子学生が集まりそうな科目等並べておけばつられて男子学生がやってくると考えてカリキュラムを組むことになる。よく駅の看板に「この大学には博士課程が設置してあります」と広告が出ている。するとどの大学にしようかと迷っている高校生はこの看板を読んで、この大学はそれ程すばらしい大学かと勘違いして志願するかもしれない。実態はといえば、学生数は全部で2-3人、指導教授は名前だけ、学生が博士課程に入学しても履修すべき科目はなく、勿論カリキュラムもなく、学生達は指導教授の周りで雑談し、教授のご機嫌を伺うしかやる事が無いというのが実態であろう。ニューヨーク市立大学の博士課程のプログラムで履修科目を調べてみたところ3年間は自分の専攻したい領域の基本的な科目を必須科目として履修する事になっているし、選択科目まで入れるとかなりの科目を7年間履修している。毎日履修している科目のことを考え、食事をしながらでも本や論文を手から離さない生活が求められる。日本の大学でもやろうと思えば出来ないとは思わないがそれらの科目を教えることが出来る教授が日本の大学に充分にいるとは考えられない。いくら文部省が博士課程の設置認可に介入し教授の資格審査をしてみたところで指導教授として認定される教授は少ない。自分が博士課程で学び、博士論文を書いて博士号を取得している教授であれば、少なくとも自分の経験から学生をどのように指導したらいいか可能であるが、博士号もない、博士論文も書いたことがない教授にどうやって学生の博士論文の指導が出来るのか誠に不思議である。その答えは博士課程に在籍している学生にあると考える。つまり、いい加減な学生が多く、心から学ぶことが好きで学問に命をかけ様などと考える学生などいなくなってしまったので、いい加減な教授の方が学生にとっては都合がいいのかもしれない。ダメ教授がダメ学生を集めているといったら言い過ぎだろうか。

博士課程に在籍している学生に「どうして多額な授業料を払ってまで博士号が欲しいのか」と聞いたところ「大学教授ほど楽をして高額のサラリーを手に入れる職業はほかにないからだ。親が生きている間に親のすねを丸かじりにして自分が楽に人生を送るために博士課程にいる」と言われて驚いたことがあった。実はその学生は修士課程で私の科目を取ったことがあり、そのときに学部の授業で私が強調した部分が出てきて、その学生に「これは学部のときに充分説明した仮説的概念で大事なところだからおぼえていますか？」と聞いたところ「勿論分かっています」と返事が帰って来た、しかし、私は彼がすっかり忘れ

てしまっているのではないかと感じたので、「本当に分かっていますか？」重ねて聞いたところ「うるさいな、分かっていると言っているではないか」と言う表情をしたので、「それではそれを黒板に書いてください」とお願いしたところ、黒板の前で立ち往生し、他の学生の前で大恥をかいたことがあった。彼はすっかり忘れてしまっていたのである。彼の学び方はその時だけよければいい、要領よく楽をして欲しいものを手に入れるにはどうすればいいかがポイントで生き方が甘く、当然理解しているはずの知識にしてもいい加減で理解の程度も浅いと感じたのもっとじっくりと論文を読むように注意したところ早速学部長に私は学生を必要以上にいじめているとクレームをつけ、その学部長から「学生をいじめないようにしてください」と注意された。私はいじめているのではなく大学院レベルの教育をしているのだと申し開きをしたが学生の入学定員割れを心配しているその老学部長には理解してもらえなかったことはいうまでもない。大学で教える重要な科目に哲学とか社会思想史、あるいは組織で働く人間の行動を学ぶ組織行動論と言う科目があるが、それらの科目を履修すると、多くの難解な論文や哲学書を読む必要があり、学生から嫌われる科目と言われているが、自分の身の周りで発生している社会現象を理解するときに必要な科目であり、必修科目にするべきであると私は考える。人間を教育するとはどういうことか博士課程の学生はその基本的な考え方を学び、しっかりとその哲学を身につけてから卒業してもらいたい、そして博士号を取得したら今までに投資したお金を早く取り戻そうなどと考えずに教えている学生の将来のために全力で教育に集中してもらいたい。しかし、すでにそのような哲学などどこにもない教授が日本の大学には余りにも多すぎる、特に企業で定年まで勤め、たまたまコネを使って教職につく教授に困った教授が多い。組織で長い間上司の命令で仕事をしてきた人間は考えなくても仕事ができるので仕事をするとはいわれたことを真面目にすることだと考えている人が多く、また組織の中の権力構造の一部になって仕事をしてきた人が多いので部下は命令すれば文句をいわずに仕事をすると思っている傾向がある。そして、たまたま定年で組織から離れても何もすることが無いので自宅で昼寝をしているよりは大学教授の方が世間体もいいし、飯も食える、有難いことだとある有名企業を定年退職し、私立大学に就職したその人は大学がこんなに楽をして給料がもらえるところだとは知らなかった、「ここは天国です」としみじみ本音を漏らしていたが、大学で教えることが飯の種だと考える点では上で述べたボンクラ博士課程の学生と同じあり、いくら一流大学を卒業し、一流企業に定年まで勤め、社長にまで出世した人であっても必ずしもその人が学生の教育に適した人間であるという証明にはならない。その人が権力を握っていたときに群がるイエスマンに対して組織で生きのびる術を教え、その取り巻きの一人がその人の名前を付けた「……学校」のメンバーですと誇らしげに自己紹介する人がいるがこの人は組織経営の何たるかを経験から学ぶのではなく、ただその時

の権力者にゴマをすっていたにすぎないと私は考える。教授会に出席している教授の顔を見渡してみても「子供が大学を卒業するまでとか、家のローンの支払いが終わるまでは教授会で言いたいことを言っただけじゃないよ」と奥さんからしっかりとされているので、血圧を下げる薬を飲みながらイライラする気持ちを抑え、じっと我慢の毎日を過ごすことになる。しかしそのような毎日を過ごしているといつのまにか周りの状況の変化に対応して行動する癖が身について、自分の置かれている状態に満足し、定年まで言いたいことも言わず、学部長とか学長などの権力者にへつらって生きるサラリーマン教授が出来上がる。

最近論議されているテーマに国立大学を独立法人にするべきだという主張があるが、私はとんでもない考えで大間違いだと考える。もし国立大学を独立法人化すると、他の多くの私立大学と同じように教育ではなく利益を出すことを目的とする大学が増え、学生は大学の大切な顧客である、従って大学は学生の要求に合わせて大学運営をするようになるので、大学本来の役割、教育機関としての存在価値を喪失する危険性が高い。例えば、学生による教授の授業評価を取り入れる大学があるがこれも間違いである。学生に楽な試験問題を出し、期末の評価も甘く、学生に優を連発する教授に対して学生は良い教授だと評価し、学ぶことに厳しい教授は悪い教授だと評価するので、やるべき勉強もしないで悪い評価をもらった学生は頭にきたと最低の評価をその教授にする、その教授に復讐するために授業評価アンケートを使うからである。さらに学生の学業成績評価に関連してアメリカでよく論議されている問題にグレード・インフレーション（学生の成績を甘くすること）がある。私の経験したことでは履修した科目で多くを学んだ学生はその教授をよい教授と評価するが、何も学ばず遊んでいた学生は勿論グレードも落ちるので、その学生はあの教授はけしからんと腹を立て復讐するので、本当によい教授の評価はよいと悪いが相殺されて平均的な評価になることに気がつき、学生による教授の評価は人気投票になる危険性があると考えた。古代ギリシャの時代に評判の悪かった陶片（オストラコン）による投票と同じで自分にとって都合の悪い教授を追放するのにこのアンケートが使われるからである。大学にしてみると厳しく学生を教育しようとするその教授のやり方は学生の大学に対する評判を落とし、落第する学生の数が増え、授業料収入が減る結果となる。それでは困ると考える収益至上主義の論理が背景にある。大学が教育の場としての使命を放棄し、利益の獲得を優先する組織に成り下ってしまう、そのような大学が最近増えていることは新聞などでも報道されているが憂慮すべき現象である。

この現象はどの大学でも起きているようで、世界の一流大学として君臨するボストンのハーバード大学でも例外ではないらしい。ウォール・ストリート・ジャーナルという経済新聞にハーバード大学の現職の教授が実名で「To B or not to B?」という記事⁽⁴⁾を載せているのを読んで驚いた。Harvey Mansfieldという行政論の教授の投稿論文である。

その記事によると、ハーバード大学でも学生の成績評価が甘くなり、履修している学生の51%がAまたはA-の成績をもらっていること、そして卒業生のなんと殆どが(91%)成績優秀者(学業成績が一定の基準に達していて学業成績優秀者)として卒業していることが判明し、これは余りにもひどすぎる、何とかしなければと大学側が動き出したと述べている。これはハーバード大学として実に不名誉なことではなぜこのような現象がおきたのか分析している。その原因として1950年代にハーバード大学のジェームス・コナンとかカリフォルニア大学バークレー校の学長だったクラーク・カーなどの自由主義論者たちが客観的な学業成績評価だけによる入学方式を導入したことにあると述べている。いわゆるメリット・システム(能力主義)の導入である。勿論それまでも試験の成績(SATとかGMAT:全米統一ビジネス・スクール入学試験)による入学判定は行われていたが、親が卒業生であるとか多額の寄付をしたなどの理由でも入学が許可されており、やり方が不明瞭であった。さらに1960年代でも成績評価のインフレは起きていて、左翼の学生が、成績評価は教授が学生をいじめる道具になっているから廃止すべきだと主張していたが勿論誰もそれを取り上げる人はいなかった。当時の教授も自分が教えている学生が可愛いので甘い成績をつけていたのかもしれない。これは親が知らない間に可愛い子供の言いなりになり結果的には子供を甘やかすことになっているのと似ている。勿論甘い成績をもらった学生は大喜びだし、大学の事務局も学生から成績に関する苦情が少なくなり手間が省ける、教授は学生の評価がいいと自分の保身となり、学生の親も勿論自分の子供が良い成績をもらうと無理をしてでも授業料を払ってよかったと考えるので、すべて丸く収まる結果となりどこにも文句のつけようが無い。学生の成績が甘くなるのは大学の教育方針などとはまったく関係なく資本主義社会の価値観から自然に出てきた結果であると私は考える。この現象についてマンスフィールド教授は自由主義的な発想をする進歩主義論者がそれまで教授が持っていた権力を消滅させたからだとして鋭く指摘している。学生を教育する責任がある大学教授はある時は産婆(有名なソクラテスの隠喩)としての役割をこなし、学生が学ぶ苦しみ乗り越えられるように懸命に汗を流して補佐し、またあるときは厳しい現場監督(taskmaster)の役割を果たしてきた。厳しく学生に学ぶことを求めるときには教授が権力を持っていないと学生は教授の言うことなど無視してしまう。楽なやり方を選んでしまうからである。例えば、教授が来週論議したいと考えている論文を学生にあらかじめ読むことを厳しく求めたとする、学生は読んでいかないと何が書いてあるのか分からないので論議に参加できないし、成績も悪くなると考えて嫌々ながらも論文を読むことになる。しかし、もしその教授に教授としての権威がないと、学生は教授の要求など無視して論文を読む苦勞を避けてしまう。さて次の週になり教授が論文のポイントを論議しようとしても履修している学生がその論文を読んでいないので学生はただ黙って座っているだけで論

文の論議は出来ない。そこで教授は仕方なく学生が本来すべきこと、つまり論文を読みポイントをつかみ、要旨を要約するという仕事を学生に代わってすることになる。黒板に論文の要旨をまとめて書き、学生はそれを自分のノートに写すのに忙しく、その論文が何を論じ、何が大事かなど考える暇もない。つまり、学生は教授の差し出す魚を丸呑みにして、試験のときはそれを吐き出して正解にし、Aを出来るだけ多く取りたいと考えているからである。Aが沢山成績表に並んでいればいい企業に就職し、給料も良く、定年まで勤め、社会的イメージも良いかも知れない。しかしそれでは学問の真髄をつかむことなど難しく、とても学生が学ぶ楽しみを味わう経験など出来ないことは明白である。

中国の古いことわざに、釣り人が苦心して釣ってきた魚を食べさせるような教育は最低の教育で、魚の釣り方を教えるのが最高の教育であるというのがあるが、最近の大学はすでに魚の釣り方を教える教育を放棄してしまったとしか言い様がない状態になってしまった。それでも無理をして教授が魚の釣り方を学生に教えようとする学生はそんなことは面倒だから早くおいしい魚を食べさせてくれと要求する、それを無視してあくまで本来の教育をしようとする学生は苦情が事務局に殺到し、学生の評価は悪くなるし、時には解雇されてしまう。学生が読むべき論文を教授が読みその要点をまとめて黒板に書き、学生がそれをノートに写す現象は何も教授が好んでやっていることではないと考えたい。しかし、資本主義社会の価値観によると教授が効率よく授業をすることは良いことであり、また教授にしてみてもその方がはるかに楽で授業はシラバス（講義などの概要、教育細目、予定、評価の基準などをまとめたもので学期の初めに学生に渡すもの）の予定通りに進むし問題は少ない、学生に学び方を教えることのほうがはるかに厄介である。大学の教育方針の思わぬ落とし穴としてこうなっているとマンスフィールド教授は論じているが私も全く同感である。確かに資本主義の前提条件である個人の自由を尊重する考え方が大学の教育方針となり、教授から権力を奪い甘えている学生に渡してしまった結果かも知れない。大学教育の授業科目を構成するカリキュラムにしても次第に学生が好んで取りそうな科目を羅列することになり、もし履修者が少ない場合はその科目はキャンセルしてしまう。大学によっては必修科目はなくなり、学生の好きな科目を好きなように取りなさいという状態になる。科目によってはある科目の履修が前提になるときもあるが、多くの場合、学生の自分勝手な主張が通りその必修科目を取っていない学生でもその科目を履修する学生が出て来る、そしてさっぱり理解できないと教授に苦情を述べる、学生は自分がその科目の内容が分からないのは教授の教え方が悪いからだと一方的に苦情を述べるから始末が悪い。

例えば、ビジネス・シミュレーションという科目があるが、この科目は大学で4年間学んだすべての科目の理論、知識、テクニックを駆使し、コンピューターで組織運営をするゲームで多くの大学がカリキュラムに取り入れている。しかし、前に履修した組織経営の

理論、知識やテクニックは甘い成績をもらった時点ですっかり忘れてしまう学生が多いのでそのゲームをどのようにプレーしたらいいかさっぱり分からない、そこで出来の悪い学生は教授に対して私の横に座って一つずつどうすればいいか教えてもらいたいと要求してくる。狙いはその教授からAをもぎ取ることにある、もしその教授がテキストをよく読んで自分の頭で考えなさいと突っぱねると、あの教授は自分でどうすればいいか知らないからだと言い張り、教授の評価アンケートにはこの教授は自分が教えている科目のことを何も知らない、学生が質問しても答えられないほど程度の低い教授であるとコメントしてくる、私の授業評価の用紙に学生のコメントが書いてあり「この教授は日本語なまりの英語で授業をするので殆どの学生は理解できず授業にならないから即刻クビにするべきである」と書いてあったのには驚いた。よほど私がその学生に出したグレードが悪く、それに腹を立て恨みの攻撃をしたに違いないと考えるが、同僚教授に聞いてみても同じような、あるいはもっと悪質なケースもあり、ありもしない話をでっち上げて攻撃してくる学生もいる、例えば、女子学生がある教授にしつこくセクハラを受けたと大学側に訴えた為に友人の教授が退職せざるを得ない状況になったこともあった。大学の事務局は学生の言い分を一方的に受け入れるし、セクハラの場合も裁判に持ち込まれたが、学生の言い分を裁判所は取り上げ、いくら真実はこうだと教授が申し立てても取り上げてもらえなかった。この場合、裁判官は教授のほうが権力をもっていると今でも固く信じているからで現実には学生のほうが権力を握ってしまっていると教授が申し立てても、負け犬の遠吠えとなり何の効果もない。アメリカ人が謳歌している資本主義社会は物質至上主義の社会で所得とか高価な乗用車、豪勢な住宅など実像のあるモノが重視され、精神的な人間の心とか社会正義など無視してしまう。すると結果として人間の心は荒廃し、お金が全て、金儲けだけが生きがいとなりその為には何をしてもいいと言う精神疾患に罹ってしまう。最近の例ではテキサスのエネルギー企業最大の規模を誇っていたエンロン社の倒産である。創業者で社長だったケネス・レイが自分の会社を発展させ、収益を上げるためにはこれしかないと言った薄外金融取引を続け莫大な負債を作り、にっちもさっちも行かなくなり破産を発表しアメリカ経済史上最大の倒産として大騒ぎになった。エンロン社の会計監査を担当していた会計事務所は厳しい監査で知られているアーサー・アンダーセン国際会計事務所でレイ社長の会社の金を使った不正な金融取引で損が出ていることを知りながら意図的に見逃したばかりでなく、その不正会計操作に関与していたとエンロンを担当した公認会計士が全て白状してしまった。そしてアンダーセン会計事務所はエンロン社の会計処理は会計基準に合致しており不正はないと監査報告書を出した。しかし、その不正が発覚しそうになると裁判所の追求から逃れるために証拠書類をシュレッダーにかけて破棄し証拠隠滅をしたとして連邦裁判所はアンダーセン会計事務所に対して有罪の判決を出した。公認会計士による企業の

財務報告書にたいする信憑性を傷つけたとしてアメリカ社会で大問題になった。この事件が新聞やTVで報道されると300社を超える企業がアンダーセンとの監査契約を破棄したと報道している。エンロンという巨大企業を倒産させ多くの株主や社員に莫大な損害を与えたことは確かに社会的大事件で、アンダーセン会計事務所は消滅するだろうと言われている。企業の金を不正に流用し、信用取引に嵌って多額の損失を出した張本人であるレイ社長に大学院で経営学を教えた某大学教授は「どこで間違ってしまったのか、しかし全ては彼の責任だ」とアメリカ社会特有の自己責任論をベースにしたコメントをアカデミー・オブ・マネジメント学会のイースト部会のニューズレター⁽⁵⁾で述べているが、組織経営による収益極大化のノウハウは教えただろうが、仕事をする時の哲学、魂までは教えなかったに違いない。このような事件はアメリカに限らず、ヨーロッパや日本など世界中で多発しており、ビジネス・スクールでは一体何を教えているのかと批判も出ている。しかし、この問題はすでに20年も前に南カリフォルニア大学のベニス教授が「リーダーズ」⁽⁶⁾と言う書物の中でアメリカのビジネス・スクールで教えている経営学は間違っているだけでなく、学生に害を与えていると厳しく批判していたが状況は変わっていないのかもしれない。確かに一般的にはマンスフィールド教授の主張しているように大学教育に自由主義的な考え方が導入されたからだという説にも頷けるが、よく考えてみると、根本的な原因として資本主義の根底にある考え方、つまり、個人主義をベースにした人間の生き方、自分が一番得することを懸命にすることはいいことだとするアダム・スミスの国富論⁽⁷⁾の論理、お金を沢山儲けることは決して悪いことではないというベンジャミン・フランクリンの考え方⁽⁸⁾が一般に受け入れられ、資本主義社会がさらに繁栄することになった。しかし、個人主義、金儲け主義、そして物質主義の3大原則が人間の心を蝕んでいると私は考える。アメリカでは高校までが義務教育であるが、中学、高校の教育が荒廃していて、基礎的な教育がいい加減なために、大学に入学してきた学生の基礎学力が低下し、大学レベルの授業についていけない学生が増え、仕方なく大学がカリキュラムの中に補講の科目を入れ急場をしのいでいるという現状を考えると、手間と時間のかかる組織で働く人間の生き方とか人間としての人格形成を目標とする教育が端の方に押しやられ、手っ取り早くどうすればもっと金が儲かるか、収益の極大化が出来るかという実学の方を優先することになってしまったのは至極当前かもしれない。しかし、資本主義社会の底辺に流れている個人主義を尊重し、自由主義的な生き方を良しとする社会は結果的に自分さえ良ければいいと考える利己主義的な生き方を認め、自分勝手な生き方をする人間がのさばる社会を作りかねない、人のことなどかまっている暇はない、それぞれが自分でどうするか考えたらい、とやかく他人の生き方や生活に干渉するのはプライバシーの侵害になるから黙って放って置けばいいのだという生き方が社会にはびこり、人間として心豊かに自分の人生を楽しむこ

とが難しい社会が出来上がる。アメリカ建国の精神であった自由、平等、民主主義という三種の神器はすでに昔の題目に成り下がり、看板だけが壁にかかっているという社会になってしまったと私は考える。

昨年(2001年)の9月11日にニューヨークのマソハッタンにツイン・タワーとして知られていた世界貿易センタービルがテロリストによって破壊され、3千人以上の人命が失われるという事件がおきた。すると皆で力を合わせてニューヨークを再建しようと“United We Stand”というスローガンが毎日のようにマスメディアによって報道され、中世の十字軍の合言葉のように「一人はみんなのために、みんなは一人のために」(One for All, All for One)と急に言い始めた。しかし、ニューヨークには基本的に他人のことなど知ったことではないと考えて生きている人たちが多く、あの事件が発生してから彼らの生き方が変わってしまったとはとても考えられない。自分さえ良ければいい、他人がそれで困ろうが自分の知ったことではないという弱肉強食の社会が出現した。大学のケースで言えば、教授はクビにならないように自分で考えたらいいのだと学生は考える、学生は自分が一番得することに精を出し、沢山Aを集めることはいいことだ、方法は問わない、結果が大事だと考えるのがアメリカ資本主義社会の価値観である。私があるユダヤ系の私立大学で経営学の授業を担当していた時であるが、ある女子学生が授業の終わる度に「今日の授業は最高でした、多くのことを学ぶことが出来ました」とか歯の浮くようなコメントをノートに書き、小さな封筒に入れてそっと私に渡してくれたことが何回かあった。そして、その学期が終わって私は彼女の成績をB+としたところ彼女が私の研究室にものすごい剣幕で怒鳴り込んできて「私は授業のたびに教授に対して優しくしたのではないか、それをAではなくB+とはひどすぎる、変えてもらいたい」と要求してきた。私はかくかくしかじかであなたはB+となったと説明したが納得してもらえず、「学部長に直接苦情を言う」と捨て台詞を残してドアをバターンと閉め、足で蹴っ飛ばして出て行ったのにはびっくりした。自分の欲しいものはなんとしてでも手に入れる、そのためには何でもするという生き方が自由主義的な考え方とマッチして受け入れられている社会での出来事である。

日本の大学の場合、成績がどのようにつけられても文句を言ってくる学生は少ない。勿論、時には卒業に必要な単位が不足しているから何とかして下さいと言う学生もいるので仕方なく成績に関係なく単位をやる場合もあるだろうが、基本的に教授の権力に挑戦してくる学生は少ない。私がある学生の論文をCと評価したら、その論文はC論文であり、どうしてその論文がCと私が評価したかその理由を学生に説明する必要は基本的にはないと私は考える。学生が自分でどうしてその論文がCと評価されたか考えるのが学ぶことになると思うからである、しかしこの考え方は東洋の哲学とか生き方が根底にあり、アメリカの大学で実践しようとするとう問題が出てくる。例えば、老子や荘子の無為自然の生き方や考

え方を説明してもアメリカの学生にとってはちんぷんかんぷんであるばかりか根底にある価値観が全く違うのでそのような考え方や生き方は受け入れられないのかもしれない。つまり講義は耳で聞こえてはいるがその意味していることは拒否し無視してしまう、理解以前の問題である。理解することが易しいとか難しいという問題ではなく価値観の違いである。確かに日本とアメリカの学生の行動には著しい違いが存在している。日本の大学の場合、教授の権力が学生のほうに移っていないことはすばらしいことで、決して甘えてくる学生の言いなりに教授はなるべきではない。特に事務局が学生の側に立って教授にあれこれ注文をつけることなどとてもない間違いで許すべきではない。アメリカの大学で教えた日本人教授として、人種差別に加えてこれまで何回も価値観の違いに起因する文化ショックとでも言うべき経験をしてきたが、学生を甘やかすだけ甘やかすアメリカの私立大学の教育は根本的に間違っていると私は考える。もしかすると日本の大学もすでにその傾向が出てきているかもしれないが、アメリカの大学の状況を見ると、お金を重視する金融資本主義社会における大学がもはや教育機関ではなく、収益至上主義の考え方に汚染され利益を追求する組織に成り下がってしまったことは悲しいことではあるがそれが現在のアメリカ大学のビジネス・スクールの実態である。

日本の大学でも大学の中に大きなホテルを建設し、大学ではなくホテル業に精を出している大学もあると言われているが、根底には大学でも収支のバランスをとり収益を出さないと大学でも倒産する、収益を出すためならなんでもする大学が増え、最近の例では帝京大学が医学部の裏口入学を認め多額の寄付金を受けとっていながら所得申告をせず脱税をしたとして摘発されたと新聞やTVなどのメディアで報道されている。帝京大学の理事長の頭の中には金儲けしかなく大学本来の使命である人間教育をすっかり忘れ、どうすればもっと金が儲かるか毎日頭を使っているのかもしれない。そして、より多くの高校生を自分の大学に志願させるにはどうすればいいかと考え、そして志願してきたら一人も逃がさないようにオリエンテーションと称して志願者と保護者に大学にきてもらい、電車賃は勿論、駅からはシャトル・バスを運行し、昼になると豪華ランチを出し、掃除された教室では模擬講義を開いて入学しても問題は何もありませんよと志願者に大学を印象づける作戦を展開しているが、これでは大学ではなく株式会社も顔負けする商売人のやり方である。このような考え方に理論的枠組みを与えているのは「大学は本来サービスを提供する産業に分類できる。従って、学生の要求に応じて大学を変えていかなければ、この大学冬の時代を乗り越えることは難しい」という考え方がある。マーケティングを専門とする教授の言いそうなことであるが、教授の中にはなるほどそういうことかとばかりに、学生を引き連れて夜の街に繰り出し、学生に鱈腹飲んだり食べたりさせ、代金は教授が払い、あの教授は学生の評判が良いと言われて悦に入っているとすれば本末転倒もはなはだしい。

大学は学生にサービスを提供する場ではなく、若くて人生経験の乏しい学生が人生の先輩である教授について学び、学ぶとはどういうことか理解し納得し、毎日の授業の中で学び方を身につけていく厳しい学習の場であると考えます。今から2500年も昔にソクラテスやプラトンがギリシャのアテネに授業料を取らないアカデミアという学びの場を創設し、学生との対話を通して知的学習を共に楽しんだ学問本来の姿に大学を変えていくためには学生の嫌う科目であっても必要であれば必修として学生に無理やり取らせる必要がある。面白くないとか、難しいから取りたくないといくら学生が苦情を述べてもそれが学ぶことだと教授は峻厳たる態度を崩してはならない。一度崩してしまうと学生は自分の得になることを大学側に要求してくる。楽をして良い成績を手に入れ、何も学ばないで卒業免状だけは授業料を払ったのだからくれるのは当たり前だと主張し、手に入れようとすることは目に見えている。その結果として学生から多額の授業料を取り、さらにもっと多くの収益を上げることに頭を悩まし、教育よりも利益を優先させるようでは大学教育全体が崩壊することになる。そのようなわけでアメリカの大学教育は駄目になっているとハーバード大学のマンスフィールド教授は指摘し、自分が勤めている大学の恥をさらしてでもアメリカにおける大学教育に対して警鐘を鳴らしているのには敬服した。

私は日本の大学がアメリカの大学教育の真似をして「学生による教授の評価制度」を取り込めとか、「シラバスの徹底」とか、「国立大学の独立法人化」などマスメディアが叫んでいるが大間違いもはなはだしいと私はアメリカの大学で十年以上にわたって教えて身にしみて感じている。勿論アメリカの大学教育から日本の大学が学ぶべきことは沢山あると言う考えには反対しないが、間違いまで真似する必要はない。日本の大学のあるべき姿を再認識し、東洋の哲学や生き方をベースにした日本の大学教育の良いところは世界に堂々と発表し、特に資本主義社会の犠牲となっているアメリカのビジネス・スクールの教育に対して日本ではこうしていると声を大にして胸を張って主張しても少しも可笑しくない。私はアメリカ社会が少しずつ「恩を仇で返すのは当たり前である」と言う社会になりつつあることを肌で感じながら、愚かな人間の小さな知恵が横行し少しでも金になりそうだと考えると夢中になって駆け回るお金重視の社会では心の平和が破壊され、そして、状況が自分の期待したようにならないと、それはすべて周りの人間とか何もしてくれない政府のせいだと周りの状況に責任をなすりつける人間が住む社会が出現し、結果として社会が不安定となり、アメリカの大学教育が崩壊しつつあることに危機感を抱くとともにアメリカ的金融資本主義をベースにしたグローバリズム社会に対する怒りの感情を抑えてこの論文をまとめたことを付け加えておきたい。

〈注〉

- (1) マックス・ウェーバーの書いた『プロスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波文庫、1989を参照されたい。
- (2) ベネディクトス・スピノザが「エティカ」の中で述べた事に関しては Warren Bennis と Burt Nanus 共著の「leaders: The Strategies for Taking Charge」, NY, Harper & Row 社、1985の75-76ページを参照されたい
- (3) 「組織と人間の行動」、白桃書房、平成14年4月、第8章：21世紀の組織が求める人間の生きかたを参照されたい。
- (4) アメリカの日刊経済新聞「The Wall Street Journal」の平成13年12月20日に出ているので参照されたい。
- (5) このコメントはアメリカ経営学会東部支部が出しているニュース・レター、Spring、2002に載っている。<http://mars.wnec.Edu/eam/> でアメリカ経営学会東部支部のインターネットのホーム・ページを開いて読むことが出来る。
- (6) 上にすでに引用している Warren Bennis と Burt Nanus 共著の「Leaders」の中でアメリカの経営大学院では学生に対して間違った経営理論をベースにした金儲けのテクニックを教えているがこれは学生が迷惑するだけではなくそれらの学生を採用し、仕事をさせている企業にとっても偉い迷惑な話で早急に改善すべきであると厳しく批判している。
- (7) スコットランドの経済学者アダム・スミスは1776年に「国富論」：An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations」、岩波文庫、を書き近代経済学を誕生させた。スミスはこの本の中で働いている人達が刻苦勉励し、稼いだ金を貯蓄し、投資しお金を増やすことはいいことだ、人間が自分の得になることに夢中になりお金を沢山稼ぐことは素晴らしいことでそうやって資本主義社会の基礎が出来て行くと述べている。
- (8) ベンジャミン・フランクリンは「商売人の心得」を箇条書きで残しており、マックス・ウェーバーが上述した書物の中で忠実に引用している。例えば、よく知られている「時は金なり」とか「金は増殖する」、商売で最も大事なことは信用である、約束したことは必ず守るべきだと今日でも充分通用する商売人の心得が述べられている。